比較地域学
今年の 4月 ,東大教養学部人文地理学教室より,
勇躍として広島大学総合科学部へ赴任してから,早
くも一年近くの時が流れ去ろうとしている。これま
での自分のささやかな足跡をみると,「 仰いでもっ
て天文を観 ,俯してもって地理を察する」<易経>
ということばを,折に触れ,頑味しては,天地の間,
わずかにあるおのれの卑少な存在を深く恥入る毎日
をおくつてきたように思える。馬令を重ねること35
年,関らは,天文から地文,地文から人事へと下り,
いささか地理ばなれしつつあるおのれに大きな驚鐘
を鳴らしてくれるのは内村鑑三であるしいわく「 地
理離るれば人なし,人離るれば事なし,故に事を成
さんと欲するものは地理を究むべし」<地人論>。
これを導きの糸にして,只今 ,まことに気宇壮大な
研究テーマに取組んでいる。題して,①「 EC経済
圏の地域構造 」,②「 ヨーロッパにおける大陸文化
と北欧文化の比較地域学的考察 」。いまこれを少し
詳らかにしてみたい。
①の課題は,学部,大学院を通じて一貫して取組
んできたテーマである。一コメコン,米 ,中 ,日の
4大経済圏に比肩しうべき経済圏に発展しつつある
ECの地域構造を,イギリスを中心に比較検討する
こと。②に関しては,ヨーロッパ諸地域にのこる村
落形態,社会組織,土地利用等の特質を,比較地域
学的に考察して,マルク・プロックのいう「 逆行的
方法 」を援用しながら歴史景観を複元すること。と
くに④ ライン・ ドナウ流域の平野,イングランドの
平野などで前世紀まで存続していた大規模な集村に
おける社会生活の相違,①大西洋縁辺地帯のケルト
的な文化景観,◎ゲランソン,ヘルムフリート,ヱ
ネキストらの地理学者によつて研究が進められてい
る「 太陽分割制による.Gewann村 」の研究 (17世
紀のスウェーデンの集落形態について一発表要旨 :
ヨーロ,パ景観発生コロキューム, ドイツ・ ヴュル
ツプルグ)を比較検討し,これらの実態をより詳細
に現地調査する。その際,推論のための有力な照準
枠は,いわゆる地帯層序論<2one and strata
Theory>に依拠する。ここから,集落,社会組織
土地利用の変化の諸系列をとりだし,特殊ヨーロッ
パ的な地域性を摘出すると同時に,地域相互間の交
流 ,とりわけ農耕文化の地域的伝播がどのような形
で展開してきたか,という問題に接近する。たとえ
ば ,大陽分割制のGervalm村は完全な集村でもない
し,耕区も小規模で ,牧区の中に散在している。そ
の成立も南ドイツのレス地帯の集村と同列に論ずる
ことはできない。しかし,こうした村の相互扶助の
慣行は福祉国家建設の精神に継承されているし,土
地利用の発展系列においても,共通して牧地 ,畑地
森林の間にスムーズな代替性が認められている。ま
たGau, coIImune, Par ish, treb (f)
などの歴史的にみて,農民の基本的生活空間をなす
基礎地域が,中世紀においてムラに分胞したこと,
それらの上位の地域系ともいうべき封建諸領域も,
最初はこれらの基礎地域を足がかりとして成長 ,拡
大したこと,封建領域相互の抗争と交流の中からあ
の強靭な Provincial cultureが凝結したこと
そしてこれらの LOCal cultureを有する諸地域
を民族レベルで統合したものこそ近代国家であった
こと―一 ― こうした地域系の発展構造を無視し
ては EC経済圏 ,大都市圏 ,都市と農村の関係など
を充分できない。
各地域の文化をその根底から理解するためには,
地域住民の生活のありようが ,景観としてどのよう
に結実したのか ,その実在をとうしてみたかれらの
精神的希求を地域に即して考察すること一地域 (的
個)性の把握一が重要であるように思われる。その
ための接近法として ,景観の発生史的アプローチを
試みる必要がある。
同郷の卓抜した国際人 ,新渡戸稲造博士が,自ら
「 大平洋のかけ橋 」たらんと欲し,はたしてそれに
ヽ
V
-5-

打ち殉じた。G・ テイラーのいう地平和 (学)
《Geopacifics>を築いていくためには,地域学
に基づいた地道な地域研究を通じて ,彼我の
間にある文化の在り方の相違―すなわち,特定地域
の風土と歴史から決して切り離すことのできない独
自の地域文化,その固有性が,同時的にも通時的に
も存在すること―を根底から認識することが極めて
重要であるように思われる。
「 研究の発展の過程には,多くの分析の仕事より
も,むしろたとえ外見上は時期尚早であっても,綜
合することが‐層役立つ時期,いいかえると問題を
解くことを試みるよりも,むしろさし当っては,間
題をうまく提起することがとくに重要な時期‐がある」
と指摘するマルク・プロックの驚鐘は二聴に価する。
分化に分化をくりかえし,自らの専門領域を,より
狭い領域へと追いやる今日の専門化,特殊化の潮流
の中にあって,プロックのいうところは,ずつしり
と重い。今日の科学研究は,すでにこうした時期に
到達していると思うのは筆者 1人のみの思い込みで
あるまい。
1978,11 -路傍の石二
. (英米研究講師)
し
ン
′
ゝ
ヽ、_/′
文明が進むと,いきおい生活様式も変わってくる
のは,いうまでもないことであるが,本の読み方ひ
とつをとってみても,明治・大正のころとはずいぶ
ん変わってきたものだと思う。わたくしの父親は,
いうまでもなく明治の人であるが,新聞を読むのに
しばしば,声を出して,独特のふしをつけて読んだ
ものだ。それでも父親は,教師でも―あったので「 :黙
読することの方が多かった力、きげんがよ力
'ら'たり:
興が乗ったりすると,独特のふしまわしの音声が出
た。祖父はもっとひどかった。声を出して読まなけ
れば,内容が頭にはいらないといって,ものを読む
ときはいつも声を出し,まるで「 どどいつ 」を□ず
さんでいるといったふぜいであった。
高等師範学校から大学にかけて教えを受けた国文
学の山岸徳平先生は,「 写すことが,いちばん読む
ことなんです 」とおっしゃられながら,和紙に筆で,
たくさんの異本をそっくり写しとられ,和とじのり
つぱな本にしたてて,保存されていた。山岸先生所
蔵の自筆本の異本というのは,ちょっと数えきれな
いほどである。
書誌学の川瀬一馬先生も,実に気軽に,そして丹
精をこめて,和とじの写本を次から次へと作られて
保存されている。写真機が普及して,学者は堕落し
たというのが,先生の回ぐせである。ごいつしょに
台湾の故宮博物館の善本調査に赴いたときは,時間
の関係から先生も貴重本を写真にとられたが,先生
は専門の写真師を同行された。ご自分で写真機をい
じつたことはないということであった。あれこれ指
定して写真をとらせながら,そばで先生は,せっせ
どメモをとり続けておられた。
私の場合は,● ヽしろい内容だな,いい文だなと
思ったときは:そつくりその部分をン■卜に写して
書名とページ数とを書いておくことにしている。戦
時中,書物がなかなか手にはいりにくかった時代,
窮余の策としてやったことであるが,そうしたノー
トがけっこうたまって役立っている。当時は,人か
らお借りした本や,図書館で閲覧の本などを多くそ
うしたが,いつか習慣になったものか,このごろで
は,かんたんに入手でき,自分のものになっている
本でも,しばしばノートしないと気がすまない。
私の知人には,新しい本を読むとき,かならず扉
の裏白を利用してかんたんな索引をつくる人がいる。
記事のうちの心にとまったものを索引にとっておく
のである。別の友人は,あらかじめ一定のカードを
準備しておいて,そこにかんたんにメモをし,その
カードに適宜見いだしをつけて,カードボックスに
入れておく。その友人は,日 ,樹熙DE鼈波の学者である。
読書と文明
-6-

本の読み方ひとつをとつてみても,時代の変遷が
ありそうである。声を出して読むという読み方は,
図書館などでははためいわ―ぐになるからすすめられ
ないが,日からの刺激だけでなく,耳をとおしての
刺激もはいるから外国語の学習などの場合には,必
要でもある。ことばや文調を記憶に残すという利点
がたしかにある。
写本をすると,なんとかしてそれをしあげたいと
いう欲もでるから,一冊の本を完全に読みこなせる。
それに書きながら読むのは,日だけで読むよりもず
っと深く読めるものである。気にいった部分をノー
トするというだけでも,その部分が細かく読めるし,
スピードはのろいが,あきがくるのが遅い。そして,
日だけで読んでいるときと違って,なに力ヽまかのも
のが残ってゆく。少くも,強い印象だけは確実に残
る。 |
手をかけて読んでおくと,もういちどふりかえる
必要が生まれたとき,再検が容易である。老眼にな
っても,自分の字だとわかりやすいという利点もあ
る。読むということは,日だけでするものだという
のは,固定観念であって,耳を使う読み方,・ 口を使
う読み方 ,手を使う読み方も別にはあり,それらを
併用すると,総合的に見てたいへんに効率がよい。
このごろは,写真機どころか,コピーの全盛時代
図書館でも必要部分をすぐコピーしてくれるし,講
義の材料もコピーで渡される。ノートをとつたり,
メモしたりするより,その部分のコピーをとった方
がたしかに早いし,正確でもある。しかしコピーは
けっきょくのところ,当面使用する資料だけのもの
であって,じっくり読もうとする対象にはならない。
写真機が普及して,学者が堕落したという論法にか
りるならば,コピニ文明は,もっとひどい結果を生
み出すだろう。便利な文明は,その裏に,たいへん
なひ弱さを秘めているものだ。諸君も,コピー利用
の軽便な読み方をせずに,手まひまかけて, じっぐ
り耽読する,重厚な読み方を習慣づけてはしいもの
だ。そのためには時に,文明に背をむけることも必
要である。 (アジア研究教授)
ヽ v
-7-